断章
旭川のアイヌ語地名研究
140
高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名㉙―

忠別川のアイヌ語名（中）

前回、忠別川のアイヌ語名には、二説あることを紹介した。一つは、チウペッ（ciw-pet 波・川）―「波立つ川」即ち「急流川」説である。もう一つは、チュプペッ（cup-pet 太陽、日・川）―即ち「日昇る川」説である。

明治二十三年九月二十日に、「旭川村」が設置される。「旭川村」は、先の忠別川のアイヌ語名のチュプペッ（cup-pet 太陽、日・川）―即ち「日昇る川」を意訳して命名されたのである。

忠別川は、現在も漢字表記の「忠別川」である。明治二十年代も、当然「忠別川」であったのが、明治二十三年になって、忠別川がアイヌ語の「チュプペッ（cup-pet 太陽、日・川）」となって、それを意訳して、「旭川村」が誕生したというのはおかしい！……という訳で、「チュプペッ」創作説が出された。

明治二十三年は、現在の神楽岡に離宮建設のために、北海道庁の調査がされている時期であった。天皇の離宮の側を流れる川が、「忠別川」では不適切である。離宮にふさわしい、「チュプペッ（cup-pet 太陽、日・川）」即ち、「日の昇る川」にしたという、「チュプペッ」創作説まで出されたのである。

アイヌ語地名研究家の山田秀三氏さえも、『アイヌ語地名を歩く』の中で、前回紹介した永田方正の「チュプペッ（cup-pet 太陽、日・川）」説について、次のように疑問を呈した。

だが、「チュプペッ（cuo-pet 太陽、日・川）」の形の名は、永田氏以前の旧記では、見たことがない。しかし永田氏ほどの人が、自分でアイヌ語を作ったろうか。チュプペッあるいはこれに近い音を聞いて、この説をなしたであろうか。

このような経緯もあり、漢字表記の「忠別川」と、片仮名表記の「チュプペッ川」の歴史を概観してみたい。

「忠別川」は、明治五年に岩村通俊の命を受けた、開拓使の高畑利宜が、明治五年六月八日に、通詞（アイヌ語通訳）の亀石熊五郎と丸木舟で札幌を出発、約三カ月にわたり上川を調査した。その調査復命書に「忠別太」が使用され、開拓使の中で、「忠別川」が定着したものと思われる。

明治六年、ワッソン一行が石狩川は愛別まで、石狩川の支流では辺別川まで調査した。その調査結果として、明治八年に、開拓使地理課から、「北海道石狩川図」が発刊、「忠別川」の漢字表記が定着した。**写真①**がそれで、この地図は、明治九年に、『北海道測量報文（英文）』でも地図が報告され、「忠別川」は国際的にも認知された。

他方、「チュツペツ川」は、明治十七年に内務省地理課・高橋不二雄と、札幌県地理課主任・福士成豊が、石狩川を遡り、大雪山まで調査し、明治二十年に、内務省地理局から、『改正北海道全図』が発刊された。その中で忠別川が、「チュツペツ川」と表記された。**写真②**がそれである。

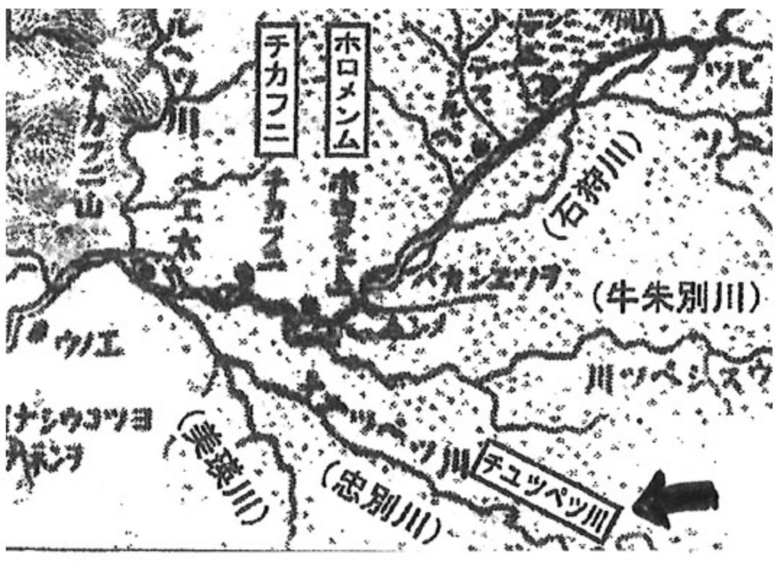
『改正北海道全図』は、明治十九年一月に開庁した、北海道庁の規範図となった。特に、地理、地質、鉱山、殖民地関係では活用され、忠別川は、「秩別川」と漢字表記された。

写真③は、明治二十一年発刊の『石狩原野殖民地撰定図』の「秩別川」である。このように、明治二十年代に、「チュツペツ川」、「チュツペツ原野」、「秩別川」、「秩別地方」などと公的に使用されていたのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

写真①『北海道石狩川図』



写真②『改正北海道全図』

写真③ 『撰定図』